

ろう者のオンガクの認知

音楽を認知する

聴者は主に耳で音楽を聴く。具体的に言えば、聴覚的な音楽を構成する音響的要素（例えば、周波数、振幅、長さ）、その要素から構成されるパターン（例えば、リズム、メロディ、和声）、さらに文化的なものとして構成する様式や楽曲のテーマ、ある種の感情などを認知している。ただし、これら多元的な諸要素をばらばらに認知しているのではない。知覚的に群化・組織化（体制化）させ、全体的まとまり（ゲシュタルト）をもったものとして認知している。ジョン・ブラッキング（1995）はこう述べている。「音楽とは人間によって組織づけられた音響（Sound）である」と。

手話を母語とするろう者は、張りと緩みを基本的要素として構成されたオンガクをどのように認知しているのだろうか。

ろう者は目で認知

張りと緩みの各要素は、手話としてのリズムにあわせて手指運動である。手や腕の筋肉を緊張させることで運動速度を上げ、小刻みに動かす場合と、手や腕の筋肉を弛緩させることで運動をやや大きくかつ速度を遅くする場合がある。※チップシート「オンガクの実践」の手話リズムに関する解説を参照。

そうした動きに呼応するように目もまた次のような3つの動きをしている。1つ目は跳躍性眼球運動だ。サックードともいう。視野内の周りの中から見たいものを瞬間的に見つけ、そこへ跳躍するように動くというものだ。2つ目は、追従性眼球運動。これは、見たいものが動いているとき、その動きと速さに追従して眼球を動かす。3つ目は調節。ある対象から詳しい情報を抽出するために、周りのものよりも鮮明に映し出そうと焦点を合わせるもの。

次に、チップシート①で述べたモチーフaとbを見た時の眼球運動はどうなるのかを考えてみる。

右図にある赤い矢印は、眼球の動きをおおまかに捉えたものだ。実線は、眼球が俊敏に動いているもの、破線は実線よりも眼球の動きがやや遅くなっているもの。緩みと張りに対応した眼球運動があることがわかる。

また、「緩み」の産出位置は胸前で、「張り」は目と同じ高さで産出されていることから、張りと緩みによって視線を向ける高さも変わることがわかる。

こうした「モチーフa」と「モチーフb」で構成されたフレーズを幾度も繰り返されると、それは規則的で躍動的なリズムを備えたものとしての眼球運動が繰り返されるだろう

また、その動きと連動して、手話リズムをすでに内在化している手話母語話者としての呼吸や固有感覚も呼応している可能性がある。

このように手話母語話者であるろう者は、張りと緩みの構成要素を有する手話のリズムに基づいた手指の動きを捉える眼球運動の組織づけられた響き（動き）からオンガクを認知しているのではないか。それは、おそらく光や振動と比べてより多元的で多彩であり、ずっと見ていたくなる響きなのかもしれない。



ろう者のオンガクの表現：張り と 緩み

固有感覚

固有感覚とは、聴者からろう者かに関わらず誰にでもある、身体の深部にある感覚である。固有感覚は、骨格筋の緊張（張り）と弛緩（緩み）を感知することで、身体の動き方を調整できる。

手話を母語として獲得しているろう者は、手話を獲得していく過程で、手話を産出するために使う手指運動が手話としてのリズムに基づいたものへとなるように、身体内の固有感覚も洗練されていると考えられる。

オンガクの表現の基本要素

ろう者が、オンガクの表現を実践する時、手話の獲得で培われた主に手と腕における固有感覚、特に張り と 緩みを活用して表現していると思われる。例えば、手話表現の中には、手や腕の筋肉を緊張させて（力を加えて）運動の速度を速める場合と、手や腕の筋肉を弛緩させて（力を抜いて）運動を遅くする場合とがある。この張り と 緩みが、長年の手話使用によって洗練されている可能性があり、ろう者のオンガクの表現においてはそうした要素が基本的に重要となる。これは、聴者が音楽的表現を実践する時、音声言語を母語として獲得することで培われた聴覚を重視し、その聴覚に基づいて発音・発声器官の張り と 緩みを調整して表現することと共通していると言える。

張り と 緩みでモチーフを構成

それではどのように張り と 緩みを使ってオンガクの表現をしているのか。例えば、映画作品「LISTEN リッスン」のワンシーンをを使って説明したい。下図のように5名以上のろう者が集まって一斉に手指によるオンガクの表現をしている。



注意深く観察してみると、緩みがある手指の動きと、張りがある手指の動きが無秩序で出るのではないことがわかる。緩みがある動きが1回→緩みの動きが1回→張りがある動きが1回（モチーフa）、一瞬間があつて、緩みの動きが2回→張りの動きが2回（モチーフb）と構成されており、これらを繰り返して楽しく表現している。モチーフとは、楽曲を形作る最小単位で、聴者の音楽の中には異なるモチーフを組み合わせることでフレーズを作っている。上図の各モチーフの最後には張りのある動きが挿入される傾向があり、その方が固有感覚に基づいたオンガクの表現として良いらしい。

ろう者もオンガクを探求できる

聴覚と対比して、ろう者のオンガクは視覚であると捉えられがちだ。しかしオンガクの表現においては、むしろ固有感覚にある。手話リズムの構成要素である張り と 緩みでどのようにオンガクの表現ができるかを探求してみてほしいと思う。